

木俣 修

愛染行者考 ～木俣修の愛と人間性

小野興二郎



平成十一年三月。木俣修十七回忌・長男高志の法用が行われ、多くの門下生が参集した。供養膳の場にまつられた二人の遺影。とりわけ六歳でこの世を去った高志の無心な笑顔が見る者の心を打った。

高志は昭和十七年七月に上梓された木俣修の第一歌集『高志』を読みかえての命名である。同年に逝った師北原白秋が生前、修に告げた「汝が長男出生の節は歌集『高志』にちなみ高志としたらばよからん」の言葉によるものだった。すこぶる利発な子であったといふ。

その高志は腎臓炎を患い、療養中に脳腫瘍に侵されて昭和二十五年十月に急逝した。修

夫妻は心の限り、手だての限りを尽くしたが、祈りはついに神仏には届かなかつた。

永別前後の苦悩

国立世田谷病院に腎臓を病む幼き高志に寄り添う日々、修は多くの作品を詠む。

硝子戸のひびに夕日のかげやけばおもひ一途に病む吾子に添ふ
病む吾子に年祝ぎの箸をもたしめてまなこぬれゆくわれも吾妻も
病む吾子が枕の下にしまひるいろは歌留多の涙ぐましも



木俣修と、しな子夫人（昭和49年）

幼子を病室おけば夜夜を氷室にくぐま
るおもひして寝る

阿羅漢の悲泣の相に近寄せし妻が眼よ
なにをもとむる

おとろへし視力こらして病む吾子が壁
に伸びきし日射しをぞ追ふ

幼子のいのち乞ひのむ夜々のいのちぞ
こもれ妻が折鶴

祈り、心を吐き出すように詠む、歌わずには
いられない思い。作者は多くの歌を作るこ
とによって心の安らぎを得ようとしたのかも
しれず、それはまた、文学に生きる者のつと
めでもあった。しかし、運命の神はついに作

者に与することはなかったのである。

右の歌の中では折鶴の歌が秀れている。作
者も妻も一心同体であつてこの歌が生まれた
に違いない。

百日

長男高志は、満六歳の生涯を終えた。

悲しみから立ち上ることは私には出来な
かつた。百日間一歩も外に出ることもなく籠
り暮した日々辛うじてなした歌のいくつ
かをここにとどめた。

昭和三十年八月に刊行した『落葉の章』中
に「百日」と題する二十七首があるが、その詞
書に、修はこう書いている。百日間一歩も外
出しなかつたとは、悲しみがいかに大きなも
のであつたかが思われる。同時にいかほど心
の限りを尽くして夫妻が看取つたかも……。

無花果は熟れて匂へどよろこびのこゑ

あげん高志汝はすでになし

罪びとのごとく坐して妻とふたり秋夜

の骨を守らんとする

背をまげて起居するとき早やわれの一

生の老とひとはみるべし

燈明は夜もしづかにまたたけば澄高禪

童子さびしまざらん

笑ふことなく過ぎて過ぎたる百日ぞと寒き
朝明の香を点する

百日間一歩も外出することなく、一日中亡
き子の骨と向かい合い香をささげる。心中に
去来するのは後悔の念ばかり。妻は食事の用
意のため外出しなければならぬ。しかし、
帰ると夫のそばに言葉なく座つたことであら
う。

このような時、二人の無言が何を語り合っ
たかは、作品につぶさに出ている。

亡き兄の靴をはきつつはしやげるその
幼らにまた涙わく

たちまちに涙あふれて夜の市の玩具売

場を逃れ来にけり

かなしみを啖ひてふとれとのたまへり

息をするだに辛くくる日に

「悲しみを啖ひて太れ」と修に言ったのは誰
だろう。同じ言葉は修は私達門下人にも言っ
た。父の死、師白秋の死、そしてなにより愛
息高志の死と向き合う中で、修はまさにそん
な生き方を体得した。その自信がいわしめた
ものだったろう。

高志の死以降、木俣修の、とくに人間を詠
む作風は一変したといつても過言ではない。

高志一周忌

亡き兄の星はあれぞと幼らがかたみに
指してきよき空

ひと年の悲苦をきざめる汝が頬を両手
にはさみなにを告げんぞ
みづみづと髪を結へよと汝にいふこと
もなくして年をゆかしむ

妻を詠む歌がとくに心を打つのは、同行二人であったという思いからであろう。一年間の月日は「はりのむしろ」そのものであったのである。

世田谷・豪徳寺

炎天を来たり吾子のおくつきに水そそ
ぐところろしづまる
この父とこの母とのみ今もかなし七年
の忌の吾子のおくつき
今日なりし著書をあわただしくまうで
来て吾子の墓にささぐる

「この父とこの母とのみ今もかなし」に胸迫るものがある。自分の著作を墓前にささげる

心象を詠んだ歌は、父はやつと仕事を始められるようになった、お前も安心して安らかにねむれよ、と告げているようだ。

だが、修夫妻の悲しみはどこへ行っても変わることなく、尽きることがなかった。それは二人のみが分け合う悲しみであり、目と目を見交わすだけで瞬時に夫妻の心に流れ合うものでもあったろう。

死の山の祭典

胸ふかく澄高禪子抱くゆゑにわれも
巫女の前にこここみぬ

みちのくの一種の霊場でもある市日は、死者の声を聞こうとして多くの人が集まる。昭和四十二年九月刊の歌集『去年今年』の中にあつて物異の風習を見せる一連である。ここでも修は子の声を耳にして胸をときめかす。そんな修はさまざまな分野の中で子を思うヒューマンな心をのぞかせている。

働きに父は遠くにゆきたりと疑はぬ瞳
よ受刑者の子ら
青く光る春の群星母子寮にかの幼らはいまはねむらん



帰ることなき父を待つ子、その目が澄んでいればいるほどに、修を無口にする。青く光りやまない星の下を、修は足重く帰ってゆくのであった。

炬火の列

胸を圧すキリシタン虐殺のこと原爆のことマイクの前にしばし眼つむる

この一首には修の思想の真実が表れている。右でもなく左でもない、人間愛こそが修の信念であった。

うつし身を白衣につつま十字切るこの
童女たち浦上キリシタンの裔
十字架を高くかかぐる少年のしづかに
炬火の列を率てゆく



木俣夫妻と筆者小野興二郎氏の長男・恵太と長女・由香

幾千の人のすみとほる聖歌のこゑ被爆の壁を祭壇として

十一年の忍苦を刻む浦上の老人の顔で

夜の弥撒の灯に

天に群星草生に虫のこゑみつる夜のいのり八万の霊にささげて

人間愛に根ざしたやさしさ。一連の歌からそんな修のおもさが見え隠れする。

妻もろとも子がために数珠を繰る残雪の冷えの徹る御堂に

〔谷汲〕

雪の谷汲へは妻と同行した。故郷の彦根の歌ではこの一首に心情が語り尽くされてい

る。亡き子への祈りは二人の命なのである。
みまかりし子の落書のある壁を妻は惜しむか移らんとして

昭和三十七年、約二十年住んだ世田谷区太子堂より杉並区高井戸の現在の家に移ろうとした時の歌。修は書物の処分などに多忙な日を送るが、妻はこの一首のように見る場所全てに亡き子の思いが去らない。

杉並区高井戸の住まいは大きな家で子供（長女翰子、次男章）にはそれぞれ部屋が与えられ、自分たちも選歌用の部屋を持つことができた。昭和二十八年に創刊した文芸雑誌「文芸広場」であちこちに出かけ、これも同年に創刊した機関雑誌「形成」の仕事も忙しくこなすなかで、「子を失った悲しみ」は遠のきつつあった。いや、そう見るのは他人である。

昭和四十九年には第十二歌集『愛染無限』が上梓される。愛染無限。実に見ごとに歌における修の世界、内実を言い当てている言葉だ。その思いは亡き子高志に中心的に向けられているようでいて、実はあまねく全ての人に対して向けられてもいた。むろん、妻にも

変化しつつ広がりを見せながら……。

後年の妻を詠む歌にはこまやかな愛のひそむものが多い。

妻がたく落葉にほへば窓あけて昏れゆく今日の短き会話す
〔天に群星〕

右やかに髪を結ぶべき盛すぎて声だに匂へ年の朝は

琉球のいろよき衣をひとつ買ふはたらしきもの妻の年の手当に
〔五年今年〕

わが歩度に合はさんとして孜々たりき妻に戦後の二十年過ぐ

手を洗へ足をぬぐへといふ声す子をまもる声は淨きひびきもつ
〔愛染無限〕

業食へるわれを裏みて積み米にし汝が歳月に触れて涙す

老の身の華奢を見よとぞ胸にさすアカシヤの白き花のひとつ

青春時代、中年、老年とかえりみながら、かたわらの妻に、見よと胸の花を示す。過ぎ去った歳月は浄化して愛染の行者をそこに立たしむ。妻と同行二人の道は、今は清らかな水の如く流れ続ける。木俣修の後方にも前方にも……。

（おの・こうじろう「泰山木」）